Session２
発表２

沈元燮　（シム・ウォンソプ　獨協大学国際教養学部特任教授）

平田由紀江（ひらた・ゆきえ　獨協大学国際教養学部准教授）

【発表概要】

豊かな暮らしのために必要不可欠であるとされた経済成長という近代の目標は、ほかの国々の例に漏れず、長らく韓国社会を覆ってきた。そしてそのために必要な大量の電力を供給するのが、「原子力発電所」であった。2040 年までに電力生産のうち原子力発電の比重を 26%から 41%に高め、12 機以上の原子力発電所を新たに建設するとした韓国政府の計画に反対する市民はごく少数にとどまっていた。しかしながら、3.11 以降の約一ヶ月間で、韓国では過去 10 年分に相当する原発関連の講演会、討論会が一気に開催され、新聞や雑誌は連日のように「福島」を報道した。日本の専門家、反核運動家の原発関連書籍が次々と翻訳出版され、『緑色評論（ノクセクピョンノン)』など知識界に影響力のある雑誌などでは「脱核」が大いに論じられるようになった。本発表では、3.11 以降に出版された雑誌記事、書籍、翻訳書籍の分析を通じ、韓国における「脱核」言説の広がりとその特徴について論じていく。経済発展と「脱核」の狭間における韓国の思想的試みを通じて、国家を超えた「危機」への反応と思想の進んでいく方向を探る。